乳幼児の人格形成（三）

中沢たえ子

三、自我と空想

ある母親が二歳八か月の娘についてこう語る。

テレビの「アルプスの少女」を見るのが大好きで、見ながらハイジになり切ってしまう。「お姉ちゃん（自分のこと）ハイジよ」と言いながら、ハイジの仕草を真似たり、家庭教師のロッテンマイヤーが画面に出てくると、自分が叱られる気持ちになって、母親のところに「ママ、こわいよ！」としがみついて来る。そのうちクララが物語の主人公的場面が続くようになると、「お姉ちゃんクララよ、歩けるようになったのよ」と言いながら、椅子につかまってやっと立ち上ろうとしたり、変な歩き方をしたりする。ほかの番組で喧嘩場面を見て、自分もカッカッとなって口をとがらして怒りながら親を叩きに来る。テレビや童話の中の主人公に簡単になり切ってしまうので見ていて本当に面白い。それがたいてい、物語の主人公や、善い役割の方を真似て、決して悪役の真似をやらないところが一層面白い。

以上が母親の話だが、クララを真似て一生懸命立ち上ろうとしている彼女の姿をほほえましく想像しながら、わたくしはつぎのエピソードを思い出す。

三歳八か月の幼児とわたくしはある時、犬と猫の指人形を使って遊んでいた。「犬さんこんにちは、遊びましょう」と猫の指人形を持ったわたくしが言うと、彼女は上手に犬の指人形を使いながら犬の言葉を言う。こんな遊びを日頃母親にあまりしてもらった経験のない彼女は、目をかがやかせて嬉しそうである。数回会話を繰返していると、突如彼女は「わたしの手、犬になっちゃったの？　嫌だ！」と恐怖の表情を示して、犬の指人形を放り出して母親の方へ走って行ってしまった。

三歳前の幼児が空想の世界で、まったく自分を没頭させてしま

うのに比べ、四歳近い子どもは没頭しようとして、次の瞬間、本来の自分を考える。大人から見れば共に空想遊びでありながら、年齢の差、また、人格発達の角度から言うならば、自我発達の段階の差によって、空想に対する本人自身の態度が異なるのは興味深い。更に、五歳、六歳に成長した幼児たちは、空想の世界と現実の世界とを明瞭に区別して、縫いぐるみの怪獣を見ても、「あんなのこわくないよ。本当は中に人が入っているんだもの」などとシラけたことを言う。そして「最近の子どもたちは現実的すぎて、夢を持たない」と大人たちを嘆かせる。

空想、ファンタジーとは、個人が現実とは離れた彼のみの思考の世界で、自由自在に持ち得るものである。子どもを含めてわれわれ現代人には夢がないと批判されるが、夢の中の一部分と考えられる空想は、絶え間なく個人の脳裏に去来している筈である。精神分析的治療では空想の内容を非常に重要視する。言葉で表現していることは本心ではなくて、本心は彼の空想の中にあることが多い。例えば職場では口喧しい上司に、頭を下げ従順に服従していながら、帰路の電車の中で上司が心臓発作で急死することを空想する。こんなサラリーマンが案外少なくはない筈。しかしこれはあくまでも空想であって、自分は決してそれを本当に望んではいない……とそのサラリーマンは自分自身に言い訳をする。

以上、幾つかの例を挙げて来たが、空想は人間の成長に伴い、次第にその内容も意味も変遷し、複雑化して来ることに気がつかれることと思う。そこで先に少し触れたが、空想を人格発達の角度、とくに自我発達の角度から整理し、考察してみよう。

まだ自我の分離、独立が完成しない二、三歳頃までの幼児の空想は、現実と非現実が明確に分かれていないために、ある瞬間には空想が現実そのものになってしまう。しかし一般に心理的に健康に育ち、母親との安定した共生的自我を持つ幼児は、非現実の空想に浸りながらも親の自我の支えを受けて、決して行方不明になったりはしない。こわい空想に会えば親の胸の中に逃げ込み、また楽しい空想であればそれを親に伝えて承認を得ようとする。すなわち親が現実なのである。このように保護された下で、ハイジやクララ、スーパーマンや宇宙人になりながら、幼児が本当にやっていることは、様々な人間像の模倣や同一化を試みることを通して、己れの自我の強化、すなわち自我の分離、独立の階段を一歩一歩登っているのである。

興味あることは、この年齢の幼児の空想没入の姿を大人たちは可愛らしいとこそ思え、問題視などは決してしないことである。われわれはまだこの年齢の幼児に現実的に振舞い、考えることを

要求しないし、むしろ非現実的であることの方が可愛らしく、面白く、さらには非理論的な彼等の言葉に詩を見出して、素晴らしいと感嘆するのである。

つぎに自我の分離、独立が次第に確立し、自他の区別、及び現実と非現実が理解できるようになる年齢、すなわち四歳から六歳頃までの幼児の空想は、より複雑な役割をはたしている。小児科をやっているわたくしに、母親たちがしばしばこんな話をする。病気してわたくしに診てもらって家へ帰ると、お医者さんごっこが始まる。弟や妹、縫いぐるみなどの胸に何かを当ててモシモシとやったり、母親の口をあけさせて、中にスプーンをつっ込んで喉を診る真似をする。わたくしはほとんど注射をしないせいか、幼児たちも注射はしないようだ。このような話を聞きながら、わたくしは自分では随分注意して子どもをこわがらせないよう診察しているつもりでも、子どもたちにとってはお医者さんに診てもらうことはやはり緊張を要することなのだナーと感じてしまう。空想遊びの中で医者の役割をとることにより、やられる立場からやる立場へ役割を転換し、受身の緊張や、不安を解消しているわけである。

お父さんごっこ、お母さんごっこ、先生ごっこ、怪獣ごっこ、歌手ごっこなどは子どもがその役割を空想し、演ずることにより自我同一化の試みをさまざまに繰り返しているものと思われる。さらに、実際の赤ちゃんが欲しくてもママが生んでくれない一人っ子は、沢山の縫いぐるみを友だちや妹、弟に仕立てて淋しさをまぎらわす。こんな時の空想は要求充足の役割を持っている。

このように空想は年長幼児の頃になると、既に発達している自我の機能の配下にあって、その自我を守り育てる役割を営んでいることがおわかり頂けよう。従って空想遊びは健康な自我の成長にとっては必須の養分である。この年齢の子どもたちは空想は非現実であり、父母から教えられた現実が別にあることを承知している。しかし承知していながらも彼らたちは、空想を行動化し言語化してしまう。もちろんそれが遊びなのであり、この点がより年上の子どもたち（学童期・思春期）、大人たちの空想とは異なる点である。後者の空想は全く表面化されず、個人の心の中に沈んでしまっている。

現実と非現実の区別に関し、大人たちは二、三歳頃までの幼児に示したような寛大さを年長幼児に示してはくれない。遊びは遊びとして、ママや先生の言うことをちゃんとおききなさいと絶えず現実介入がある。この点についてつぎに一例を挙げて、読者の方々とご一緒に考えたい。

●五歳八カ月の少女例

幼稚園々長の勧めで父母に伴われて五歳八か月の少女が相談に訪れる。問題はつぎのようなことである。幼稚園の庭に太い木がありその途中に小さな小屋を置き、梯子がかけてある。子どもたちはお遊びの時間には其処へ登ったり降たりして遊ぶことが許されている。昨日の朝、彼女は其処へ年少組の男の子を一人つれて登り、二人共お猿さんだと言って教室へ入る時間になっても降りて来ない。お猿さんらしい恰好をしてキャキャと鳴き、先生が呼んでも、「わたしたちはお猿さんだからここに住んで居るのキャキャ」という反応をする。驚いた担任は園長を呼んで来た。園長もしばらく手こずりいろいろと説得して三十分位して二匹のお猿さんはやっと地上に降りた……というのである。普段とても明るく良い子なのにこんな事をするなんて、この子の精神内界に何か異常なものがあるのではなかろうか、自分が猿だと全く信じ込んでしまうなんて……。ぜひ一度精神科医の診察を受けてもらいたい、と園長はその日の午後、母親に告げ、翌日、緊急に診察を求めて来たわけである。これを語りながら両親は深刻な面持ちである。早速知能テストを施行したところ、知能指数一三五と優秀知能であり、テスト中、少しも変なところはなく、むしろハキハキとよく答えてとても良い子であると心理学者は報告する。つぎにわたくしが遊戯室で遊ぶところを観察する。遊戯室には人形の家、家具、家族人形、その他この年齢の女の子の好きそうなものが揃っている。彼女は入室するとたちまちにそれらの玩具を使って素晴らしい空想遊びを展開し始めた。その内容はわたくしも既に忘れてしまったが実に豊富な空想力がつぎつぎと湧き出して止まるところを知らないという感じである。本当に楽しそうな空想を語りながら遊ぶ彼女に対し、わたくしは時折、わざと現実的な質問、例えば彼女の家族の名前や年齢、日常の生活内容などを聞いてみた。これに対し彼女はすべて正しく返事する。従って空想遊びは稀に見る程に素晴らしいものであるが、彼女がその間に決して自分を見失っているものとは思われない。その後で母親と面接したところ、母親は心配そうにつぎのようなことを語った。

実は母親は幼稚園の先生として結婚する迄働いて居り、子どもと遊ぶのが大好きで、毎日彼女と二歳半の男の子と三人で空想遊びをする。母親自身空想がつぎつぎと出、また子どもたちに沢山夢を持たせたいとねがうので、これまで本当に沢山空想を語りながら遊んで来ている。でもそれがいけなかったのでしょうか……というわけである。わたくしは母親の話を聞いてなるほどと納得

ができた。この少女は、人格発達上何らの問題はなく、むしろ高い知能と豊かな空想力、さらに良い母子関係に恵まれた素晴らしい子どもであると診断した。幼稚園でのハプニングは彼女の空想力があまりに豊富であるために、つい折角始めた空想遊びがすぐ止められなかったに過ぎない。

この旨を両親に伝えると共に、母親には空想遊びを少しへらして下さい、そうすれば今度のような問題を起こさなくてもすむでしょうから……とつけ足して置いた。もちろん両親は非常に安心をし、母親も自分が注意するとのべてこの相談は終了した。その後、わたくしは〝長靴下のピッピ〟という童話を娘と共に読みながら、この母子のことを思い出し、母親にあんな助言をしなかった方が良かったのでは……と反省したものである。

幼児は空想を容易に行動化するために、彼女のように豊富な空想性に満たされると、つい遊びが逸脱してしまうのだが、その背景に健康な母子関係、年齢相応に成熟した自我が存在するならば、成長するうちにはその空想性は必ず豊かな才能となる筈である。幼児が日々 play out する（遊びで表す）空想が健康なものか、不健康なものか、それを判断することは、その幼児の人格発達、性格形成の健康、不健康を推測するメジャーともなり、それをすることは親や、教師の任務である。

五、六歳以後の子どもの嘘、ありもしないことをあるように平気で言うなどの問題は、もう現実は充分理解できる筈なのに……と大人たちを非常に心配させ、このような子どもは何時も叱られてばかりいる。叱られるために言いのがれの嘘をつき、元来嘘は空想ではないが、そのうちに嘘が空想となり、さらに空想が本人にとっては現実になってしまうこともあり得る。空想性虚言症とは以前、このような子ども、大人に与えられた精神医学的診断名であり、内因性（遺伝的）問題に基づく一種の病的性格であると考えられた。しかしこの考えは現在ほとんど支持されていず、この病名も使われてはいない。

●八歳のA男の例

八歳になるA男は頻々と家出、無賃乗車を繰り返し、思いあまって母親が相談に訪れた。家庭は父母、大学生になる兄、姉と本人で経済的にも安定し、母親は心配症で口喧しいけれど、A男の事は痩せるばかりに心配している。A男の問題は五歳頃より目立ち始め、嘘、ありもしないことを平気であると言う、幼稚園で友だちと遊べず一人でフラフラしていることが多いなどであった。

小学校入学後も同様で、次第に嘘の内容が複雑化し、他人が聞いてそのまま信じてしまうことも多くあった。一例を挙げると、僕のお父さん、お母さんは死んでしまって、叔父さん、叔母さんのところに貰い子に来た、という嘘を近所の大人たちに話し歩き、それを信じていた隣人もあった。頻々と家を出て汽車に乗り、一番遠いところでは広島まで遠征したこともあり、駅員に保護されると、叔父さんのうちだと言って自宅の住所を教えた。母親の供述によると、A男が生後十か月頃、母親は結核と診断され、療養所に入院し、彼の養育は家政婦にまかせられたという。母親が退院したのはA男が三歳六か月頃であったが、その後も母親は万一病気を幼児に移してはという不安からおよそ抱くことはしなかったという。母親不在の間、家政婦は五回程替わり、その間の彼の様子は、母親はもちろんのこと昼間在宅しない父、兄、姉にも詳しくはわからない。彼の空想通り、自我発達の基礎固めの幼児期早期に、現在の母親は彼にとっては実の母親ではなかったのである。問題に気づいてから（五歳以降）母親は一生懸命になり出したが、その頃彼は未だ共生的自我の経験すら無く、ただ叱ったり言いきかせたりするだけではどうにもならなかったわけである。

この例のように重篤な自我の発育障害のために現実と非現実の区別ができない問題は、貧困を含めた崩壊家庭、母親が重い性格障害、精神異常などの家庭の子どもの中に比較的多く認められる。さらに盗みなどの反社会的行為が加わる例も少なくはなく、非行、反社会的問題児の対策には、彼らの空想を含めた人格形成についての理解を忘れてはならないことである。

前回、〃自我と攻撃性〃において内気で他人から被害ばかり受けている人が、その内心では非常に攻撃的な空想を抱いていることが多い、とのべたが、それは既に幼児期にも認められることである。幼稚園の集団にも入れず、オドオドとしていじめられてばかりいる幼児が、空想遊びの中で交通事故で車も人も総べてメチャクチャになってしまうシーンを繰り返し、繰り返し展開するのを観察した事がある。

幼児期には幸いなことに、大抵の空想は容易に行動か遊びに表現されてしまう。しかし学童期以降からは空想は次第に思考の中に沈み、容易に把握できなくなる。それだけに、人格発達の障害を極力早期に発見、予防するためには、空想が容易に把握できる幼児期に自我発達状態との関連において空想を正しく観察、理解したいものである。

（中沢小児クリニック）